

## 薬物乱用・依存の世帯調査

分担研究者 福井 進 国立精神・神経センター精神保健研究所  
薬物依存研究部部長  
研究協力者 和田 清 同研究部室長  
伊豫 雅臣 同研究部室長  
浦田重治郎 国立精神・神経センター国府台病院  
第一病棟部長  
尾崎 茂 東武丸山病院

**研究要旨** 無作為に抽出した全国の15歳以上の男女5千人を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存に関する疫学調査」を施行した。有効回答数(率)は3,946(78.9%)であった。日常生活のあり方、喫煙・飲酒の状況、睡眠薬など合法的な依存性薬物の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、薬物乱用に対する意識調査、周囲で違法薬物を乱用している人の周知度、違法薬物の乱用に誘われた経験の有無、違法薬物の乱用経験の有無について調査を行った。最近1年間で治療の目的で、精神安定薬を使用した人は6.1%、睡眠薬を使用した人は4.7%であり、50歳以上の人により高率であった。海外旅行などで滞在中に薬物乱用に誘われた人は3.0%、実際乱用した人は0.7%で大麻が多く、海外旅行・滞在中に大麻乱用の機会が多いことを示していた。これまでに薬物乱用に誘われた人は、有機溶剤1.7%、覚せい剤0.6%、大麻1.0%であった。これまでに薬物を乱用した人は、有機溶剤1.4%、覚せい剤0.3%、大麻0.4%であり、大麻の潜在的乱用者が多いことが判明した。

### A. 研究目的

薬物乱用・依存問題は、世界各国とも深刻な社会問題に発展しており、その対策に苦慮している。近年、欧州一部の国では大麻などの違法薬物の規制を緩和しようとする傾向がみられ、対策が混乱している。

わが国では、覚せい剤と有機溶剤が主要な乱用薬物として25年以上にわたり乱用されており、個人の心身への弊害のみならず、社会に大きな影響を与えてきた。海外との交流が盛んになるにつれて大麻事犯検挙者は増加していたが、1993年は検挙者数は2千人を超え、1994年も増加しており<sup>6,7</sup>、大麻乱用の流行が危惧される。コカイン乱用の兆候はみられるが、その実態はまだ明らかでない。近年、睡眠薬の乱用問題が社会問題化してきた。わが国の薬物乱用をめぐる状況は楽観出来る状況にはない。

わが国の薬物乱用・依存に対する確固たる対策を立てることが必要である。しかし、薬物乱用・依存の実態の把握なくしては難しい。

われわれは、全国の精神科医療施設、救命救急センター、中学校、児童福祉施設など多面的な疫学調査を施行し、実態の把握に努めてきた。

特に、薬物乱用が大きな社会問題となっている米国では1972年より世帯調査 household survey が実施されており、薬物乱用の治療・予防・教育の基礎資料となっている。

わが国でも薬物乱用・依存の世帯調査が長年にわたり望まれてきたが、厚生科学研究費にて、平成4年度は市川市民1,100人<sup>2</sup>、平成5年度は東京圏、大阪圏の住民3,000人<sup>3</sup>、そして平成6年度は東京圏、大阪圏、北九州圏の住民3,300人<sup>4</sup>を対象に疫学調査を実施して、調査内容、調査方法、調査結果の分析について

し、平成7年度の全国調査に備えてきた。

平成7年度の世帯調査はわが国で行われた初めての全国的、本格的な調査研究である。薬物乱用・依存の実態の把握と予防・教育・啓発対策の基礎資料となることを目的とする。

### B-1. 研究方法

企画は分担研究者の福井が担当し、調査の実施は社団法人「新情報センター」に委託した。

- ・地域 全国
- ・対象 市区町村に住む満15歳以上の男女  
標本数5,000
- ・抽出方法 層化2段無作為抽出法  
(調査地点数=350)
- ・調査方法 調査員による個別訪問留置法
- ・調査内容 前年度の調査結果を参考にして別表(末尾)の66からなる質問内容を設定
- ・調査期間 平成7年10月3日～10月31日
- ・調査機関 社団法人新情報センター  
なお、資料の集計は新情報センターが行ない、解析は福井が行なった。

### B-2. 標本抽出方法－層化2段無作為抽出法

標本抽出に用いた層化2段無作為抽出法について説明する。表1に示した表を参考にしたい。

#### [層化]

1. 全国の市区町村を都道府県を単位として

次の11地区に分類した。

北海道地区 = 北海道

東北地区 = 青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

関東地区 = 茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県

北陸地区 = 新潟県、富山県、石川県、福井県

東山地区 = 山梨県、長野県、岐阜県

東海地区 = 静岡県、愛知県、三重県

近畿地区 = 滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県

中国地区 = 鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国地区 = 徳島県、香川県、愛媛県、高知県

北九州地区 = 福岡県、佐賀県、長崎県、大分県

南九州地区 = 熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

2. 各地区においては、さらに都市規模によって次のように16分類しそれぞれを第1次層として、計46層とした。

○大都市(各都市ごとに分類)

(東京都区部、札幌市、仙台市、千葉市、横浜市、川崎市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市)

○人口10万人以上の都市

○人口10万未満の都市

○町村

表1 地区・都市規模による調査標本数と地点数－標本数(地点数)

規模 地区	大 都 市				人口10万 以上の市	人口10万 未満の市	郡 部 (町村)	計
	東京都 区部	横浜 京都	川崎・大阪 北九州	その他 の市				
北海道				69(5)	68(5)	32(3)	59(4)	228(17)
東北				37(3)	117(8)	93(6)	144(10)	391(27)
関東	331(23)	133(9)	48(4)	34(3)	613(42)	222(15)	200(14)	1581(110)
北陸					84(6)	67(5)	74(5)	225(16)
東山					71(5)	55(4)	80(6)	206(15)
東海				85(6)	214(15)	92(6)	100(7)	491(34)
近畿		57(4)	103(7)	60(4)	360(24)	126(9)	113(8)	819(56)
中国				43(3)	121(8)	63(4)	85(6)	312(21)
四国					65(5)	40(3)	65(5)	170(13)
北九州			41(3)	49(4)	70(5)	80(6)	99(7)	339(25)
南九州					88(6)	58(4)	92(6)	238(16)
計	331(23)	190(13)	192(14)	377(28)	1871(129)	928(65)	111(78)	5000(350)

**〔標本数の配分及び調査地点の決定〕**

地区・都市規模別各層における母集団数（平成6年3月31日現在の15歳以上の人口）の大きさにより、5,000の標本数を比例配分する。人口密度により標本数を比例配分する作業を層化という。なお、各調査地点の標本数が10～16になるように調査地点を決めた。

**〔抽出〕**

1. 第一次抽出単位となる調査地点として、平成2年国勢調査時に設定された調査地区を使用した。
2. 調査地点（調査区）の抽出は、調査地点数が2地点以上割り当てられた層については、抽出間隔＝〔層における国勢調査時の15歳以上人口（計）〕÷〔層で算出された調査地点数〕を算出し、等間隔抽出法によって抽出した。また、層内で調査地点数が1地点の場合には、乱数表により無作為に抽出した。

調査地点を選ぶ操作を1段という。

3. 抽出に際しての各層内における市区町村の配列順序は、平成2年国勢調査時の市町村コードに従った。
4. 調査地点における対象者の抽出は、調査地点の範囲内（町・丁目・番地等を指定）で標本となる対象者が抽出できるように抽出間隔＝〔調査地点における国勢調査時の15歳以上人口〕÷〔調査地点抽出標本数〕

を算出し、住民基本台帳より等間隔抽出法によって抽出した。地区から対象者を抽出する操作を2段という。

郵送法による調査の場合は、層化の段階で無作為に抽出はできるが、調査員による訪問回収の場合は地域を設定する必要があって、層化2段無作為抽出法が統計的に最も適した方法であり、われわれは今年度の調査でも層化2段無作為抽出法を採用した。

**C. 結果**

**1. 回収結果(表2)**

有効回収数（率）は3,946（78.9%）であっ

た。過去3回の調査でいずれも70%を超えていたが、特に今年度は予想を上回る高い回答率であった。

事故数（率）は1,054（21.0%）であり、その内訳は下表の通りである。

調査期間中に調査対象住民より15件の電話による問い合わせがあったが、いずれも調査の目的、調査会社の性質を確認する問い合わせの質問であり、調査は特に問題なく順調に実施されたと言える。

地区別の回答数（率）は表3に示す

**表2 回答数（率）及び事故数（率）**

調査対象数	5,000（100%）
回答数（率）	3,946（78.9%）
事故数（率）	1,054（21.0%）
事故の内訳	
転居	99（2.0%）
長期不在	66（1.3%）
一時不在	271（5.4%）
住居不明	20（0.4%）
拒否	493（9.9%）
その他	105（2.1%）

**表3 地区別の回答数（率）**

地区	標本数	回答数（率）
北海道	228	188(82.5)
東北	391	327(83.6)
関東	1581	1178(74.5)
北陸	225	200(88.9)
東山	206	179(86.9)
東海	491	402(81.9)
近畿	819	624(76.2)
中国	312	251(80.4)
四国	170	143(84.1)
北九州	339	263(77.6)
南九州	238	191(80.2)
計	5000	3946(78.9)

表4 対象の性、年齢、学歴

性別 ＼ 年齢	総数 (%)	男性 (%)	女性 (%)
	3946(100.0)	1883( 47.7)	2063( 52.3)
15～19歳	312( 7.9)	151( 8.0)	161( 7.8)
20～29歳	542( 13.7)	229( 12.2)	313( 15.2)
30～39歳	634( 16.1)	254( 13.5)	380( 18.4)
40～49歳	856( 21.7)	397( 21.1)	459( 22.2)
50～59歳	744( 18.9)	386( 20.5)	358( 17.4)
60歳以上	858( 21.7)	466( 24.7)	392( 19.0)
学歴			
小学卒	79( 2.0)	38( 2.0)	41( 2.0)
中学卒	675( 17.1)	376( 20.0)	299( 14.5)
高校卒	2065( 52.3)	913( 48.5)	1152( 55.8)
大学卒	997( 25.3)	510( 27.1)	487( 23.6)
無回答	130( 3.3)	46( 2.4)	84( 4.1)

表5-1 職業別分類（就業形態）

対象 ＼ 就業形態	総数	男性	女性
	3946	47.7	52.3
自営業（計）	703	63.4	36.6
自営業主	471	81.3	18.7
家族従業者	232	27.2	72.8
勤め人（計）	1832	55.2	44.8
勤め人（民間会社）	1185	68.8	31.2
勤め人（公務員）	214	60.3	39.7
勤め人（パート等）	433	15.7	84.3
学生（計）	301	47.5	52.5
中学生	29	51.7	48.3
高校生	191	46.1	53.9
予備校生	7	85.7	14.3
専門学校・各種学校生	19	52.6	47.4
短大・大学・大学院生	55	43.6	56.4
主婦専業	634	-	100.0
無職	386	60.6	39.4
*有職（計）	2535	57.5	42.5
*無職（計）	1321	28.5	71.5

## 2. 調査結果

### (1) 回答者の性、年齢、学歴、職業別分類 (表4、5-1、5-2)

回答者は3,946人であり、地区により回答率の違いはあるが、調査結果は全体を報告する。必要に応じて地区別比較を行う。

性、年齢、学歴、職業は、表4、5に示した。

性別は、男性1,883人(47.3%)、女性2,063人(52.7%)であり、女性が多かった。

学歴は、大学卒25.3%(男性27.1%、女性23.6%)、高校卒52.3%(男性48.5%、女性55.8%)、中学卒17.1%(男性20.0%、女性14.5%)、小学校卒2.0%(男性2.0%、女性2.0%)であった。高校卒以上の学歴を有する

人は77.6%で、高学歴化社会を示す結果であった。大学卒は20歳代、30歳代は39.3%と高く、年齢が高くなるにつれて低率を示していた。

地区別では、大学卒は関東地区30.2%、北九州地区30.0%、近畿地区27.4%と高率であり、四国地区、南九州地区は低率であった。高校卒は概して地方に高い傾向であった。なお、大学卒は旧制高等学校・短大、高校卒は旧制中学、中学卒は尋常高等小学校、小学校卒は尋常小学校を含むものである。

職業別分類をみると、女性が各職種に進出していることがわかる。

表5-2 職業別分類(仕事内容)

対 象	総 数	男 性	女 性
仕事内容	3946	47.7	52.3
自営業 (計)	671	64.4	35.6
農林漁業	124	63.7	36.3
商店主	161	55.3	44.7
工場主	90	72.2	27.8
土木建設業主	109	78.0	22.0
医療関係事業主	14	57.1	42.9
サービス業事業主	126	58.7	41.3
その他の事業主	47	68.1	31.9
勤め人 (計)	1768	55.5	44.5
販売従事者	266	47.0	53.0
保安従事者	24	91.7	8.3
運輸従事者	66	92.4	7.6
通信従事者	6	83.3	16.7
サービス業従事者	102	27.5	72.5
技能職従事者	62	45.2	54.8
土木建築業従事者	101	95.0	5.0
工場労働者	296	63.2	36.8
その他の労務従事者	67	44.8	55.2
事務従事者	377	41.6	58.4
管理的職業	97	96.9	3.1
医療職従事者	76	14.5	85.5
その他専門・技能職従事者	154	72.1	27.9
その他	74	35.1	64.9

(2) 日常生活に関する質問

最近1年間の健康状態及び生活状態への質問

1) あなたの健康状態はいかがですか (表6)

健康状態はよくないと回答した人は654人(16.6%)であり、男性16.5%、女性16.7%であり、男女差はない。男女とも年齢が50歳を越えると「よくない」と答える人は高率となり、50歳代19.4%、60歳代25.9%であった。

2) あなたは、日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか (表7)

「意欲がなくなることがある」と回答した人は1,105人(28.0%)であり、10歳代、20歳

代の若年層に高率、高齢者に低率の傾向を認めた。

3) あなたは、毎日の仕事・学業でうまくいかないことがありますか (表8)

「仕事・学業でうまくいかない」と回答した人は1,477人(37.4%)であり、年齢層が低いほどその傾向を認めた(20歳未満57.1%)。

4) あなたは、日常の生活で不安を感じ、緊張したことがありますか (表9)

「日常生活で不安感、緊張感を感じる」と回答した人は1,684人(42.7%)であった。

年齢差はそれほど認めなかったが、男女とも40代、50代に高い傾向を認めた。

表6 健康状態はいかがですか (%)

総対象数	良好である	概ね良好である	時々思わしくない	常時調子が悪い	無回答	良好 (小計)	よくない (小計)
3946人 (100.0)	1228 (31.1)	2041 (51.7)	567 (14.4)	87 (2.2)	23 (0.6)	3269 (82.8)	654 (16.6)

表7 日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか (%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある (小計)	ない (小計)
3946人 (100.0)	285 (7.2)	820 (20.8)	2170 (55.0)	641 (16.2)	30 (0.8)	1105 (28.0)	2118 (71.2)

表8 毎日している仕事でうまくいかないことがありますか (%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある (小計)	ない (小計)
3946人 (100.0)	347 (8.8)	1130 (28.6)	2074 (52.6)	346 (8.8)	49 (1.2)	1477 (37.4)	2420 (61.3)

表9 日常の生活で不安を感じたり、緊張したことがありますか (%)

総対象数	たびたびある	ある	あまりない	まったくない	無回答	ある (小計)	ない (小計)
3946人 (100.0)	303 (7.7)	1381 (35.0)	1844 (46.7)	379 (9.6)	39 (1.0)	1684 (42.7)	2223 (56.3)

5)あなたは、寝つけなかったり、早朝目覚めて眠れないことがありますか(表10)

「入眠障害」や「途中覚醒」を週に1~2回以上あるのを睡眠障害群にした。

睡眠障害に悩んでいる人は424人(10.7%)認めた。男性9.4%、女性11.5%であり、女性が高率であった。高年齢者に高率であり、男性は60歳以上で17.4%、女性は50歳代で12.6%、60歳以上で22.4%であった。

「たまにある」との回答は1904人(48.3%)であったが、男女差、年齢差ともあまりなく、睡眠障害ととらなかつた。

しかし、回答形式が抽象的であったと思う。

6)あなたは、眠りすぎたり、昼間眠くてたま

らないことがありますか(表11)

「週に1、2回ないし3回以上ある」と回答した人は492人(12.5%)であり、男女差はなかつた。特に若年層に高率で、20歳未満で28.2%であった。若年層の夜更かしか生活リズムの乱れが大きく影響しているものとする。

7)あなたは、現在の生活に満足していますか(表12)

「現在の生活に満足している」「まあ満足している」と回答した人は3240人(82.1%)であり、男性79.2%、女性84.7%であった。大きな年齢差はないが、高年齢層に満足していると回答した人がより高率であった。

表10 寝つけなかったり、朝早く目覚めて眠れないことがありますか(%)

総対象数	週に3回以上ある	週に1、2回ある	たまにある	ない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
3946人 (100.0)	152 (3.9)	272 (6.9)	1904 (48.3)	1601 (40.6)	17 (0.4)	424 (10.7)	3505 (88.8)

表11 眠りすぎたり、昼間に眠くてたまらないことがありますか(%)

総対象数	週に3回以上ある	週に1、2回ある	たまにある	ない	無回答	ある(小計)	ない(小計)
3946人 (100.0)	189 (4.8)	303 (7.7)	2332 (59.1)	1092 (27.4)	24 (0.6)	492 (12.5)	1601 (40.6)

表12 現在の生活に満足していますか(%)

総対象数	満足している	まあ満足している	少し不満である	全く不満である	無回答	満足(小計)	不満(小計)
3946人 (100.0)	852 (21.6)	2388 (60.5)	597 (15.1)	78 (2.0)	31 (0.8)	3240 (82.1)	675 (17.1)

(3) 嗜好品に関する質問

1) 喫煙

a. あなたは、現在たばこを吸っていますか

① 喫煙率（年齢と性別）(表13)

現在、喫煙をしている人（率）は1290人（32.7%）であり、男性53.3%、女性13.9%であった。

男性は20歳未満は22.5%、20歳代62.0%で、年齢が上がるにつれて喫煙率が高くなり、40歳代の64.5%が最高であった。50歳代、60歳以上になると喫煙率はやや低下していた。

女性は20歳代が18.8%、30歳代が21.1%と高率であり、年齢が高くなるにつれて喫煙率は低下していった。20歳未満は3.7%であった。

喫煙本数は、男性は11～20本/日、21本以上/日の喫煙者が多いのに対し、女性は20本/日以下の喫煙者が多かった。

② 禁煙者率（表13）

現在、禁煙をしている人は504人（12.8%）であり、男性19.9%、女性6.3%であった。

男性は、40歳代から禁煙者は増え始め、50歳代21.2%、60歳以上35.6%と増えている。

女性は、20歳代（11.2%）、30歳代（9.5%）が高率であった。

b. (喫煙者への質問)

これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか（禁煙のこころみ）（表14）

喫煙者1290人に対し「健康その他の理由で禁煙をしようとしたことがあったか」の質問に対し、「禁煙を考えたが実行していない」507人（39.3%）、「禁煙に失敗した」352人（27.3%）と回答しており、喫煙者の66.6%が禁煙をしたいと考えていたことが判明した。

c. あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか（初回喫煙経験年齢）（表15）

喫煙経験者1794人に、初めてたばこを吸った時を質問した。

初めてたばこを吸った時は、小学校時代2.6%、中学校時代11.4%、中卒後18歳未満17.9%、18～20歳未満36.4%、20歳以後29.4%であり、約70%の人が20歳未満で初めて喫煙を経験していた。特に未成年者は、小学校時代12.5%、中学時代32.1%が喫煙を経験しており、年齢層が高くなるにつれて18歳以降から喫煙を経験する率が高くなった。若年層の喫煙開始の低年齢化を示す結果である。

表13 あなたは、現在たばこを吸っていますか (%)

該当数	1日に 1～10本	1日に 11～20本	1日に 21本以上	パイプた ばこを吸 う	喫煙者数 (率) 計	現在禁煙 中	以前から 吸ったこ とがない	非喫煙者 (率) 計
3946人 (100.0)	345 ( 8.7)	619 (15.7)	321 ( 8.1)	5 ( 0.1)	1290 (32.7)	504 (12.8)	2003 (50.8)	2507 (63.5)
男1883人	(11.2)	(26.1)	(15.8)	( 0.2)	(53.3)	(19.9)	(24.1)	(44.0)
女2063人	( 6.5)	( 6.2)	( 1.2)	( 0 )	(13.9)	( 6.3)	(75.1)	(81.3)

表14 (たばこを吸っているかたにおたずねいたします)

これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか (%)

該当数	禁煙を考 えたこと はない	禁煙を実 行してい ない	禁煙を失 敗した	その他	無回答
1290人 (100.0)	374 (29.0)	507 (39.3)	352 (27.3)	34 ( 2.6)	23 ( 1.8)



表15 あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか (%)

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
1794人 (100.0)	47 (2.6)	204 (11.4)	322 (17.9)	653 (36.4)	528 (29.4)	40 (2.2)

表16 あなたが、本格的にたばこを吸い始めたのはいつ頃ですか (%)

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
1794人 (100.0)	3 (0.2)	48 (2.7)	181 (10.1)	598 (33.3)	598 (46.9)	122 (6.8)

d. あなたが、本格的にたばこを吸い始めたのはいつ頃ですか (表16)

本格的に喫煙を始めた時期を質問したが、面白半分に、あるいは誘われて喫煙を始めた時期に比べて、本格的に喫煙を始めた時期は大分遅れていることを示していた。

小学校時代、中学時代に本格的喫煙を始めた者は少なく、多くは18歳を過ぎてからであった。当然であるが、20歳未満の喫煙者は中学時代17.9%、中学卒業後44.6%と高率であった。また、本格的喫煙時期については男女で大きな差はなかった。

2) 飲酒

a. アルコール(酒、ビール、ウイスキー)はお飲みになりますか(性、年齢の関係)(表17)

アルコールを飲むという人の率は68.4% (男性81.3%、女性56.7%)であった。

「殆ど毎日飲む人」は22.9% (男性39.7%、女性7.5%)であり、男性は40歳代、50歳代の50%を超える人であった。女性は30歳代の10%が最高であった。男性は「週に2~3回」以

上の習慣飲酒者が多く、女性は「月に1~2回」以下の機会的飲酒者が多かった。

「飲酒しない人」は29.1% (男性16.9%、女性40.3%)であった。

b. 飲酒の機会(複数回答)(表18)

飲酒をすると回答した2700人の飲酒の機会は「家での食事、団らんで飲む」61.1%、「友人・同僚・上司のつきあいで飲む」37.3%、「その他のつきあいで飲む」14.6%、「仕事、商売の必要で飲む」11.9%の順で多かった。「家での食事、団らんで飲む」は男女とも30歳代以上で多く、男女差を認めなかった。それに対し、「友人・同僚・上司のつきあいでの飲酒」は男性は20歳代に最も高率で、30歳代、20歳未満の順であった。女性は20歳未満、20歳代に多く、男女ともに若年層に多い傾向を認めた。「仕事、商売上の飲酒」は、男性の30歳代、40歳代、50歳代に多かった。「家で面白くないことがあった時飲む」は女性に多く、特に20歳未満、30歳代に高率であった。

表17 アルコール(酒、ビール、ウイスキー等)はお飲みになりますか (%)

総対象数	全く飲まない	年に10回以内飲む	月に1~2回飲む	週に1回飲む	週に2~3回飲む	週に4回飲む
3946人 (100.0)	1104 (28.0)	556 (14.1)	481 (12.2)	259 (6.6)	336 (8.5)	166 (4.2)

ほとんど毎日飲む	現在禁酒中	無回答	飲む(計)	飲まない(計)
902 (22.9)	46 (1.2)	96 (2.4)	2700 (68.4)	1150 (29.1)

**C. あなたが、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか（表19）**

飲酒経験のある2746人中、初めてアルコールを飲んだのはいつかと質問したところ、「小学校時代」6.9%、「中学校時代」8.7%、「中卒後18歳未満」13.5%、「18～20歳未満」37.4%、「20歳過ぎてから」28.8%であり、約70%が未成年の間に経験をしていた。

20歳未満の人は、小学校時代（24.5%）、中学時代（31.1%）に多く経験していた。男性は40歳以上、女性は30歳以上の50%以上の人々が18歳過ぎてから飲酒を経験したと回答していた。

**d. あなたが、本格的にアルコールを飲み始め**

**たのはいつ頃ですか（表20）**

飲酒経験のある2746人に、本格的にアルコールを飲んだのはいつ頃かと質問した。「小学校時代」0.2%、「中学校時代」0.9%、「中卒後18歳未満」6.1%、「18～20歳未満」28.0%、「20歳過ぎてから」57.1%であり、喫煙に比べ、本格的飲酒は大分遅い。

20歳未満の人の68%が中学卒業後20歳未満と回答していた。特に男女差はなかった。

20歳代以上の人々の多くが18歳過ぎてから本格的に飲酒を開始したと回答していた。

**表18 最近主にはどのような機会に飲むことが多いですか（複数回答）**

該当数	仕事や商売で必要	友人・上司関係	その他のつきあい	家で食事・団らん時	寝るまえに飲む
2700人 (100.0)	321 (11.9)	1008 (37.3)	393 (14.6)	1650 (61.1)	296 (11.0)

仕事等で不愉快時	家庭で不愉快時	その他	無回答	回答計
65 (2.4)	47 (1.7)	37 (1.4)	35 (1.3)	3852 (142.7)

**表19 あなたが、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか（%）**

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
2746人 (100.0)	189 (6.9)	240 (8.7)	371 (13.5)	1026 (37.4)	791 (28.8)	129 (4.7)

**表20 あなたが、本格的にアルコールを飲み始めたのはいつ頃ですか（%）**

該当数	小学校時代	中学校時代	中学校卒業後	18歳過ぎてから	20歳過ぎてから	無回答
2746人 (100.0)	6 (0.2)	25 (0.9)	168 (6.1)	769 (28.0)	1568 (57.1)	210 (7.6)

(4) 医療用薬物の使用に関する質問

1) 次の薬のうち、あなたの家庭にいつも用意しているものすべて○をつけてくださいー常備薬の種類ー(複数回答)(表21)

「特に常備薬を用意していない」と答えた人は9.4%であり、89%が「何らかの常備薬」を家庭に用意していた。

風邪薬78.1%、胃腸薬74.2%、湿布薬59.1%、鎮痛薬40.8%、ビタミン剤34.2%が多い常備薬であった。

2) 次の薬のうち、あなたが常用している薬がありますかー常用薬の種類ー(複数回答)(表22)

「常用薬は特にない」と答えた人は58.1%であり、「何らかの薬を常用している」と回

答した人は34.5%(男性35.7%、女性33.5%)であって、男女とも年齢が高くなるにつれ高率で、特に50歳代43.1%、60歳以上60.5%の人が常用薬をもっていた。

常用薬は、ビタミン剤13.2%、胃腸薬12.3%、血圧の薬8.5%が比較的多い薬であった。

胃腸薬、血圧の薬は男性に多く、ビタミン剤、鎮痛薬は女性に多い傾向を認めた。

依存性を有する治療薬として鎮痛薬1.5%、精神安定薬2.0%、睡眠薬1.3%であった。

鎮痛薬の常用者は特に年齢差はなかった。精神安定薬、睡眠薬の常用者は特に60歳以上の人に高率であり、前者で5.1%、後者で3.8%の人が常用していたと回答した。

表21 次の薬のうち、あなたの家庭にいつも用意しているものすべてに○をつけてください(複数回答)

総対象数	特に用意していない	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝薬	鎮痛薬	精神安定薬
3946人 (100.0)	370 (9.4)	3081 (78.1)	2927 (74.2)	1351 (34.2)	92 (2.3)	1609 (40.8)	179 (4.5)

睡眠薬	抗生物質	湿布薬	その他	無回答	回答計	用意あり(計)
123 (3.1)	282 (7.1)	2331 (59.1)	134 (3.4)	66 (1.7)	12545 (317.9)	3510 (89.0)

表22 次の薬のうち、あなたが常用している薬がありますか(複数回答)(%)

総対象数	特にない	風邪薬	胃腸薬	ビタミン剤	強精強肝薬	鎮痛薬	精神安定薬
3946人 (100.0)	2293 (58.1)	156 (4.0)	485 (12.3)	519 (13.2)	40 (1.0)	59 (1.5)	80 (2.0)

睡眠薬	抗生物質	血圧の薬	その他	無回答	回答計	常用あり(計)
50 (1.3)	32 (0.8)	335 (8.5)	161 (4.1)	290 (7.3)	4500 (114.0)	1363 (34.5)

3)最近1年間に、次にあげる薬を使用したことがありましたか－医療用の向精神薬の使用率(表23)

質問は、薬物別に使用の有無を問うているが、表23に一括してまとめた。

①鎮痛薬を使用した人

「最近1年間に頭痛、生理痛以外に慢性の身体的痛みのため鎮痛薬を使用した人」は1377人(34.9%)であり、男性26.8%、女性42.3%と女性の方が高率であった。

男女とも20歳代から40歳代に比較的高い使用率を認めたが、大きな年齢差はあまりなかった。

週に数回以上の常用者率は3.0%に認めた。

入手先は医院・病院38.9%、薬局26.7%、家族(常備薬)から40.2%であった。

②最近1年間に精神安定薬を使用した人

「最近1年間に精神安定薬(抗不安薬)を使用した人」は241人(6.1%)であり、男性5.2%、女性6.9%と女性にやや多い傾向を認めた。

特に、男女とも60歳を過ぎると急激に精神安定薬の使用者が増え、男性11.2%、女性15.1%と高齢者に使用率が高い傾向を認めた。

「週に数回以上の使用者」は2.6%であり、常用者と考える。

精神安定薬の入手先は病院85.1%と医療機

関が主であった。

精神安定薬の使用者241人の使用理由は、不眠45.1%、ストレスの軽減15.8、不安の治療13.7、高血圧の治療11.6%など何らかの精神的、身体的疾患の改善であり、殆どが治療目的による使用であった。1人(0.4%)だけ遊びの目的と答えた。

5)最近1年間で睡眠薬を使用した人

「最近1年間に睡眠薬を使用した人」は186人(4.7%)であり、うち男性4.4%、女性5.0%と女性にやや多い傾向を認めた。

特に、男女ともに60歳を過ぎると急激に使用者が増加し、男性10.1%、女性11.2%と高齢者に高い使用率を示した。

「週に数回以上の使用者(常用者)」は1.6%であった。

使用理由(複数回答)は「不眠の治療」71.5%、高血圧の治療9.7、その他身体疾患の治療7.5%、その他精神的苦痛改善5.9%と精神的苦痛、身体疾患など治療の目的が主であった。遊びの目的と回答した人はなく、睡眠薬が乱用目的で使用していることが非常に少ないことを示唆している。

睡眠薬の入手先(複数回答)も、病院84.1%、薬局3.8%と医療機関からの入手が主であった。

表23 最近1年間に使用した医療用の向精神薬

薬物名	年に数回 使用	月に数回 使用	週に数回 使用	日に1～ 3回使用	日に数回 以上使用	使用者 (小計)
鎮痛薬	982 (24.9)	276 (7.0)	64 (1.6)	51 (1.3)	4 (0.1)	1377 (34.9)
精神安定薬	94 (2.4)	45 (1.1)	47 (1.2)	51 (1.3)	4 (0.1)	241 (6.1)
睡眠薬	85 (2.2)	37 (0.9)	44 (1.1)	※19 (0.5)	1 (0.0)	186 (4.7)

※睡眠薬は日に1回

(5) 薬物乱用に関する意識調査

1) 薬物乱用という言葉を知っていますか (表24)

1650人(41.8%)が「知っている」と回答したが、「詳細を知っている人」は248人(6.3%)のみであった。

2) 次の薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけて下さい。

－乱用薬物の名前－ (複数回答) (表25)

大麻、麻薬、覚せい剤、シンナーは90%前後の人が知っている」と回答した。コカイン、

モルヒネ、ヘロインは80%前後、ヒロポンは60%が知っていた。トルエン44.5%、LSD 41.0%、であり、特に、有機溶剤24.0%、クラック16.0%は低い回答率であった。

3) 乱用薬物を使用すると、依存(使用を止めたくも止められなくなる状態)が形成されることを知っていますか (複数回答) (表26)

乱用薬物は依存を形成することを、3408人(86.4%)が「よく知っている」「だいたいわかる」と回答した。

表24 薬物乱用という言葉を知っていますか (%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
3946人 (100.0)	248 (6.3)	1402 (35.5)	1949 (49.4)	246 (6.2)	101 (2.6)	1650 (41.8)

表25 次の乱用薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけてください (複数回答) (%)

総対象数	大麻	モルヒネ	ヘロイン	麻薬	コカイン	L. S. D	ヒロポン	覚せい剤
3946人 (100.0)	3490 (88.4)	3133 (79.4)	3133 (79.4)	3436 (87.1)	3231 (81.9)	1618 (41.0)	2366 (60.0)	3540 (89.7)

トルエン	シンナー	有機溶剤	クラック	どれも知らない	無回答	回答計	知っている(計)
1754 (44.5)	3615 (91.6)	949 (24.0)	632 (16.0)	86 (2.2)	96 (2.4)	31079 (787.6)	3764 (95.4)

表26 乱用薬物を使用すると、依存が形成されることを知っていますか

総対象数	よく知っている	だいたいわかる	知らない	無回答	知っている(計)
3946人 (100.0)	1507 (38.2)	1901 (48.2)	440 (11.2)	98 (2.5)	3408 (86.4)

4)「あへん戦争」について知っているか  
(表27)

あへん戦争について「詳細を知っている」は6.9%、「多少知っている」は33.1%で40.0が知っており、一方、半数以上が「知らない」と回答した。

5)米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか(表28)

米国・中南米の麻薬戦争を901人(22.8%)のみが知っているとは回答した。

6)覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思えますか(表29)

「覚せい剤乱用問題は一般の人々にも関係のある問題である」と3502人(88.7%)の人

が認める回答をした。

7)「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる可能性がある」と思えますか(表30)

「自分に薬物乱用の誘惑の手が伸びてくる可能性がある」と考えている人は531人(13.5%)のみで、薬物乱用は自分とはあまり関係がない問題と捉えている人が多かった。

8)「シンナー遊び」が一部未成年者の間で流行していると思えますかー有機溶剤乱用の周知度(表31)

「シンナー遊び」が一部未成年者の間で流行していることを「知っている」と回答した人は3579人(90.7%)で、殆どの人が認識していた。

表27 「あへん戦争」について知っていますか(%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
3946人 (100.0)	273 (6.9)	1306 (33.1)	1790 (45.4)	503 (12.7)	74 (1.9)	1579 (40.0)

表28 米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか(%)

総対象数	詳細を知っている	多少知っている	聞いたことがある	全く知らない	無回答	知っている(計)
3946人 (100.0)	128 (3.2)	773 (19.6)	1644 (41.7)	1315 (33.3)	86 (2.2)	901 (22.8)

表29 覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思えますか(%)

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う(小計)	思わない(小計)
3946人 (100.0)	1752 (44.4)	1750 (44.3)	303 (7.7)	53 (1.3)	88 (2.2)	3502 (88.7)	356 (9.0)

9)覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか－覚せい剤乱用の周知度（表32）

「覚せい剤がわが国で乱用されている」ことを3476人（88.1%）の人が認識していた。

10)家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか（表33）

この質問に対し、「ほとんどない」と回答した人は2507人（63.5%）であって、家庭内で薬物乱用問題が話題として語られる家庭が少ないことを示していた。

薬物乱用問題に関する認識度の質問について、「シンナー遊び」、「覚せい剤乱用」がわが国の主要な薬物乱用問題であって、一般の人に広がりつつある危険な状況にあることは認識しているが、自分とはあまり関係ない問題と考えている人が多かった。また歴史、外国の問題、概念などについての認識度は比較的低かった。

表30 「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることがある」と思いますか（%）

総対象数	非常にそう思う	まあそう思う	あまり思わない	全くそう思わない	無回答	思う (小計)	思わない (小計)
3946人 (100.0)	100 (2.5)	431 (10.9)	1635 (41.4)	1706 (43.2)	74 (1.9)	531 (13.5)	3341 (84.7)

表31 「シンナー遊び」が一部の未成年者の間で流行していることを知っていますか（%）

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
3946人 (100.0)	1506 (38.2)	2073 (52.5)	311 (7.9)	56 (1.4)	3579 (90.7)

表32 覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか（%）

総対象数	よく知っている	多少知っている	知らない	無回答	知っている(計)
3946人 (100.0)	1210 (30.7)	2266 (57.4)	403 (10.2)	67 (1.7)	3476 (88.1)

表33 家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか（%）

総対象数	ほとんどない	話題になった	時々話す	無回答
3946人 (100.0)	2507 (63.5)	977 (24.8)	379 (9.6)	83 (2.1)

(6) 海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

1)あなたは、海外旅行、出張、留学をしたことがありますか(複数回答)(表34)

海外に滞在したことのある人は、1412人(35.8%)と回答した。その内訳は、旅行が1302人(33.0%)と最も多く、海外出張128人(3.2%)、仕事で駐在32人(0.8%)、留学33人(0.8%)その他であった。

海外に出たことがない人は、2460人(62.3%)であった。

2)海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか(表35)

該当者1412人中、「薬物の使用の噂を聞いたことのある人」88人(6.2%)、「薬物を使

用した人を知っている人」53人(3.8%)であった。その中で、海外旅行者の比率は低く、仕事で滞在、海外留学など長期滞在者に比率は高かったが、人数的には海外旅行者が多い。

3)海外滞在中に、あなたは薬物使用を誘われたことがありますか(表36)

1412人中、42人(3.0%)が誘われたことがあったと回答した。

4)海外滞在中に、あなたが使用された薬物があれば教えてください(表37)

1412人中、10人(0.7%)が薬物を使用したと回答した。大麻が最も多く8人(0.6%)、コカイン1人(0.1%)、その他1人であった。

表34 あなたは、海外旅行、海外出張、海外留学をしたことがありますか(複数回答)(%)

総対象数	したことがない	海外旅行をした	海外出張をした	海外に仕事で駐在	海外留学をした	他理由で海外生活	回答計	海外滞在中(計)
3946人 (100.0)	2460 (62.3)	1302 (33.0)	128 (3.2)	32 (0.8)	33 (0.8)	37 (0.9)	4066 (103.0)	1412 (35.8)

表35 海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか(%)

該当数	知らない	うわさを聞いた	知っている	無回答
1412人 (100.0)	1230 (87.1)	88 (6.2)	53 (3.8)	41 (2.9)

表36 海外滞在中に、あなたは薬物使用を誘われたことがありますか(%)

該当数	ない	ある	なんとも言えない	無回答
1412人 (100.0)	1214 (86.0)	42 (3.0)	8 (0.6)	148 (10.5)

表37 海外滞在中にあなたが使用された薬物があれば教えてください(複数回答)(%)

該当数	使用したことなし	大麻	コカイン	ヘロイン	その他	無回答	回答計	使用した(計)
1412人 (100.0)	1208 (85.6)	8 (0.6)	1 (0.1)	-	1 (0.1)	194 (13.7)	1412 (100.0)	10 (0.7)



(7) あなたの周囲で、薬物を乱用している（乱用していた）人を知っていますか（○は一つ）－薬物乱用者の周知度－  
 補問. その人が使用している（使用していた）薬物は何ですか（複数回答）（表38）  
 回答は「最近1年以内に知っている」「1年以上前に知っている」に分けた。薬物名についても質問した（複数回答）。間接的に乱用者の存在を知る目的である。  
 回答を一つの表（表38）にまとめた。

これまでに乱用者を知っていると回答した人は289人（7.3%）であった。  
 乱用している（乱用していた）薬物名は、有機

溶剤209人（5.2%）、覚せい剤68人（1.7%）、大麻42人（1.0%）、コカイン14人（0.35%）、ヘロイン4人（0.1%）、薬物不明24人（0.6%）であった。

なお、現在の乱用者である疑いのある「1年以内に乱用した人を知っている」と回答した人は61人（1.5%）であった。その内訳は、有機溶剤39人（0.9%）、覚せい剤13人（0.3%）、大麻10人（0.25%）、コカイン5人（0.14%）、薬物名不明8人（0.2%）であった。

昨年度の調査に比べ、最近の有機溶剤乱用者の減少と、コカインの増加が特徴であった。

表38 あなたの周囲で、薬物を乱用している（乱用していた）人を知っていますか（%）  
 その薬物名も教えて下さい（複数回答）（%）

総対象数	1年以内で知ってる	1年以上前に知る	なんとも言えない	無回答	知らない	知っている（計）
3946人 (100.0)	61 (1.5)	196 (8.1)	83 (2.1)	99 (2.5)	3475 (88.1)	289 (7.3)
有機溶剤	39 (0.9)	170 (4.3)	—	—	—	209 (5.2)
覚せい剤	13 (0.3)	55 (1.4)	—	—	—	68 (1.7)
大麻	10 (0.25)	32 (0.8)	—	—	—	42 (1.0)
コカイン	5 (0.14)	9 (0.21)	—	—	—	14 (0.35)
ヘロイン	1 (0.02)	3 (0.08)	—	—	—	4 (0.1)
薬物不明	8 (0.2)	16 (0.4)	—	—	—	24 (0.6)
無回答	—	4 (0.1)	—	—	—	4 (0.1)

（注：乱用薬物の比率は総対象数（3,946人）を母数としたものである）

(8) あなたご自身、これまでに次にあげる薬物の使用に誘われたことがありますか (表39)

質問は、「最近1年間に誘われた」「1年以上前に誘われた」に分けた。誘った人は乱用者との想定のもとに質問をした。

1) 誘われた経験 (表39)

① シンナー等有機溶剤

「これまでにシンナー等有機溶剤の使用を誘われた経験がある」と回答した人は69人 (1.7%) で、「最近1年間に誘われた人」は6人 (0.2%) であった。

② 覚せい剤

「これまでに覚せい剤の使用を誘われた経験」と回答した人は23人 (0.6%) で、「最近1年間に誘われた人」は2人 (0.05%) であった。

③ 大麻

「それまでに大麻の使用を誘われた」経験があると答えた人は41人 (1.0%) で、「最近

1年間に誘われた人」は7人 (0.2%) であった。覚せい剤に比較して大麻に誘われた人が多いの特徴であり、これは過去3年間の調査結果と一致していた。

該当者41人中、海外の旅行、滞在経験のある人は26人 (63.4%) であって、海外での生活の影響が大きいことを示唆している。高校卒、大学卒の高学歴者が多く、覚せい剤、有機溶剤とは異なる階層に属していた。

④ コカイン

「これまでにコカインの使用を誘われた」経験があると回答した人は8人 (0.2%) であり、「最近1年間に誘われた人」は2人 (0.2%) であった。

⑤ ヘロイン

「それまでにヘロインの使用を誘われた」経験があると回答した人は6人 (0.2%) であり、最近1年間の人はいなかった。ヘロインなどオピエート系麻薬の乱用が殆どないことを示唆する結果である。

表39 あなたご自身、これまでに以下薬物の使用を誘われたことがありますか (%)

対象薬物	ない	最近1年 間にある	1年以上 前にある	なんとも 言えない	無回答	誘われた (計)
有機溶剤 (100.0)	3792 (96.1)	6 (0.2)	63 (1.6)	27 (0.7)	58 (1.5)	69 (1.7)
覚せい剤 (100.0)	3782 (95.8)	2 (0.05)	21 (0.5)	10 (0.3)	131 (3.3)	23 (0.6)
大麻 (100.0)	3775 (95.7)	7 (0.2)	34 (0.9)	16 (0.4)	114 (2.9)	41 (1.0)
コカイン (100.0)	3841 (97.3)	2 (0.05)	6 (0.2)	3 (0.07)	94 (2.4)	8 (0.2)
ヘロイン (100.0)	3847 (97.5)	— —	6 (0.2)	6 (0.2)	87 (2.2)	6 (0.2)

2)誘った人は誰か（複数回答）（表40）

誘われた経験のある人に、誘った人は誰かの質問をした

①有機溶剤に誘った人は誰か

該当者69人中、「学校の友人・知人」41人（59.4%）と最も多く、「その他の友人・知人」28人（40.6%）が続き、「密売人」3人（4.3%）、「恋人（愛人）」「見知らぬ人」それぞれ2人（2.9%）であり、有機溶剤乱用には、学校の友人・知人、その他の友人・知人の影響が強いことを示唆している。

②覚せい剤に誘った人は誰か

該当者23人中、「学校の友人・知人」4人（17.4%）、「その他の友人・知人」16人（69.6%）、「密売人」5人（21.7%）、「恋人（愛人）」「見知らぬ人」それぞれ2人（8.7%）であり、多くは学校外のその他の友人・

知人から誘われ、それら仲間の影響が大きいことを示唆している。

③大麻に誘った人は誰か

該当者41人中、「その他の友人・知人」21人（51.2%）と最も多く、「学校の友人・知人」7人（17.1%）、「密売人」4人（9.8%）、「見知らぬ人」10人（24.4%）、「恋人（愛人）」2人（4.9%）などであった。「その他の友人・知人」の影響の大きいことを示している。

④コカインに誘った人は誰か

該当者8人中、「その他の友人・知人」3人（37.5%）、「学校の友人・知人」2人（25.0%）であり、「家族」「密売人」、「見知らぬ人」それぞれ1人（12.5%）であった。

⑤ヘロインに誘った人は誰か

該当者6人中、誘った人は「その他の友人・知人」5人（83.3%）であった。

表40 薬物乱用に誘った人は誰か（複数回答）（%）

薬物名	該当数 (%)	学校の友人知人	その他の友人知人	恋人 (愛人)	家族	密売人	見知らぬ人	その他
シンナー等 有機溶剤	69 (100)	41 (59.4)	28 (40.6)	2 (2.9)	- -	3 (4.3)	2 (2.9)	2 (2.9)
覚せい剤	23 (100)	4 (17.4)	16 (69.6)	2 (8.7)	- -	5 (21.7)	2 (8.7)	- -
大麻	41 (100)	7 (17.1)	21 (51.2)	2 (4.9)	1 (2.4)	4 (9.8)	10 (24.4)	1 (2.4)
コカイン	8 (100)	2 (25.0)	3 (37.5)	- -	1 (12.5)	1 (12.5)	1 (12.5)	- -
ヘロイン	6 (100)	- -	5 (83.3)	- -	- -	1 (16.7)	2 (33.3)	- -

(9) あなたは、これまでに次の薬物を使用したことがありますか－違法薬物乱用の経験の有無－(表41)

次の違法薬物の乱用を「最近1年間」、「1年以上前」に経験したかについて質問した。

1)「シンナー遊び」の経験の有無

「シンナー遊び」を経験したと回答した人は57人(1.4%)で、そのうち「最近1年間に経験した」と回答した3人(0.07%)であった。

最近1年間に使用した3人は20歳未満1人、20歳代1人、50歳代1人であった。

「過去に経験した」と回答した人は54人(1.4%)で、20歳代が最も多く、次いで30歳代、40歳代、20歳未満の順であった。

57人中、男性42人(73.7%)、女性15人(26.3%)で、男性が多かった。

2)覚せい剤の使用経験の有無

覚せい剤を経験したと回答した人は12人(0.3%)で、そのうち「最近1年間に経験した」と回答した人は2人(0.05%)は30歳代、50歳代の各1人であった。

「過去に経験した」と答えた人は10人(0.3%)で、20歳代から60歳以上と幅広くいた。

12人中、男性7人(58.3%)、女性5人(41.7%)と、男性が多かった。

7%)と、男性が多かった。

3)大麻の使用経験の有無

大麻を経験したと回答した人は17人(0.4%)であった。そのうち「最近1年間に経験した」と回答した人は2人(0.05%)で、20歳代、30歳代の各1人であった。「過去に経験した」と答えた人は15人(0.4%)で、20歳代6人、30歳代5人、40歳代2人、未成年、50歳代各1人であり、年齢層が広いことが特徴であった。

17人中、男性11人(64.7%)、女性6人(35.3%)で、女性にも浸透しており、大麻乱用の深刻さを示唆する結果である。いずれも高校卒業、大学卒業の学歴を持つ人で、有機溶剤、覚せい剤に比べ学歴が高いのが特徴であった。海外での生活を経験した人は12人であり、海外での生活経験と関係が高いことを示唆している。

「薬物乱用に誘われた経験の有無」の質問と同様に、大麻が覚せい剤を上回っていたことが特徴であった。過去3回の調査でも同様であった。大麻がダークなイメージが少なく回答し易いことを考慮しても、予想以上に大麻の潜在的な乱用者が多いことが考えられる。

表41 薬物乱用を過去、現在に経験した人(率)

薬物名	一度も経験ない	最近1年間にしたことあり	過去に経験にした	無回答	経験した(小計)
シンナー等 有機溶剤	3811 (96.6)	3 (0.07)	54 (1.4)	78 (2.0)	57 (1.4)
覚せい剤	3844 (97.4)	2 (0.05)	10 (0.3)	90 (2.3)	12 (0.3)
大麻	3859 (97.8)	2 (0.05)	15 (0.4)	70 (1.8)	17 (0.4)
コカイン	3872 (98.1)	2 (0.05)	1 (0.0)	71 (1.8)	3 (0.07)
ヘロイン	3881 (98.4)	-	1 (0.0)	64 (1.6)	1 (0.0)

#### 4) コカインの使用経験の有無

コカインの使用を経験したと回答した人は3人(0.07%)であった。そのうち、「最近1年間に使用した」人は2人(0.05%)で、30歳代、50歳代の男性各1人であった。

「過去に経験した」と回答した人は1人(0.04%)で20歳代の男性であった。

過去3回の調査で、最近の乱用経験者の報告はなかったが、今年度は初めて報告があった。コカインの社会での乱用状況はまだ不明であるが、コカインが確実に社会に出回っていることを示唆する結果である。

#### 5) ヘロインの使用経験の有無

ヘロインの使用経験者は「過去に経験した人」1人(0.0)のみで、20歳代の男性であった。過去の調査でもオピエイト系麻薬の報告はほとんどなかった。

### D. 考察

平成7年度は、全国の市区町村の住民5,000人を対象に「薬物乱用・依存の世帯調査」を施行した。調査結果の一部は平成6年度の東京・大阪・北九州圏の調査結果<sup>4</sup>と比較しながら考察をする。

#### 1. 世帯調査と回収率

平成4年度厚生科学研究費補助金麻薬等対策総合研究事業の一つとして「薬物乱用・依存の世帯調査」の実施の機会を得て市川市民1,100人を対象に薬物乱用・依存に関する世帯調査<sup>2</sup>を実施し、調査内容、調査方法を研究した。それを参考にしながら平成5年度は東京圏・大阪圏の住民3,000人<sup>3</sup>、平成6年度は東京・大阪・北九州圏の住民3,300人<sup>4</sup>へと調査地域、調査対象を拡大しながら、平成7年度の全国調査に備えた。

調査方法は層化2段無作為抽出法を用いた。初めに説明したように、地区・都市規模別各層における母集団数の大きさにより、5,000の標本数を比例配分し(層化の作業)、調査地点と調査地点における対象者を統計法にのっとり無作為に抽出したものである。

平成5年度、平成6年度の調査方法は調査圏の標本数をあらかじめ決めており、各圏内にて層化2段無作為抽出法で対象者を抽出したものであり、統計的には正しいといえない。

平成7年度の調査は、その意味においては層化2段無作為抽出法にのっとり施行された本格的調査であり、統計的にも意義があると信じる。

これまでの回答率は、平成4年度73.8%<sup>2</sup>、平成5年度70.8%<sup>3</sup>、平成6年度73.2%<sup>4</sup>と70%を超えていたが、平成7年度は78.9%と最も高い回答率であり、この種の調査が可能であることが判明した。

調査内容も、違法薬物乱用の実態のみならず、日常生活のあり方、喫煙・飲酒など嗜好品の使用状況、家庭における常備薬、睡眠薬など医療用向精神薬の使用状況、海外生活と薬物乱用の関係、薬物乱用に関する意識など多岐にわたっていた。単に薬物乱用のみならず、国民の精神保健を考える上でも有効であると考ええる。

調査で最もとらえたいのは、覚せい剤など違法薬物の乱用発生率の把握である。

しかし、米国のように国民の6%が違法薬物の使用を経験者である国では3~5千人単位の調査でも発生率の把握は可能であるが、わが国のように発生率が1%以下の場合には把握は難しい。

その問題を補うため、住民の周囲に存在する乱用者の周知状況、住民自らが乱用に誘われた経験など間接的な調査結果を交えて総合的に検討することにより、現在の乱用者の発生率と実態を把握が可能となると考える。

「薬物乱用・依存に関する世帯調査」はやっとスタートしたばかりである。今後、経年的に全国調査を実施することにより、わが国の薬物乱用の実態の把握と、それに基づく薬物乱用・依存の教育、啓発、予防そして治療対策を考える貴重な資料が出来るであろう。

#### 2. 日常生活に関する質問について

「健康状態」に不安を感じるようになるのは、当然ながら高齢者である。50歳代で5人に一人、60歳以上で4人に一人が何らかの精神的・身体的不調を感じていた。それが精神安定薬、睡眠薬の常用が増える因子になっているのであろう。

入眠障害、途中覚醒などの睡眠障害も高齢になるにつれて増え、60歳以上の人で5人に一人が睡眠障害で悩んでいる。睡眠問題について

は、これまでは一分の研究者を除いて関心をもたれてこなかったが、睡眠障害は身体的・精神的苦痛には伴うものであり、高齢化社会を迎えるにあたり医療のみならず福祉の分野でも研究されなければならぬ課題であろう。一方、若年層より高年齢層に「現在の生活に満足している」と感じている人が高率であった。

日常生活の中で、意欲がない、仕事・学業・家事がうまくいかないと感じる人はいずれも若年層に多かったが、自己の確立がまだ不十分なこと、これからの未知の人生に不安を抱えていることがこの結果になったものと考ええる。

「日常生活で不安感、緊張感をもつ」と回答した人は男女とも40歳代、50歳代に比較的高率に認められたのは、その年代の人に社会的にも、家庭においても問題が多くなる状況を反映していると考ええる。さらに身体的問題も加わり、50歳代、60歳を過ぎると後述の睡眠薬、抗不安薬の常用者が高率になっていくのであろう。

### 3. 嗜好品

#### (1) 喫煙

喫煙率は、32.7%（男性53.3%、女性13.9%）であり、平成6年度の調査結果<sup>4</sup>と比較すると0.7%増加している。それは喫煙率の高い北海道地区、東北地区などが調査地域に加わったことが関係している（たばこ産業の調査では北海道、東北の喫煙率は高い）。

平成7年5月に、日本たばこ産業株式会社が、全国の20歳以上の16,000人を対象に喫煙の実態調査を実施しており、喫煙率36.4%（男性59.0%、女性14.8%）と報告している。それに比べると、われわれの調査の喫煙率は低い、調査対象に未成年者が含まれていることが関係していると考え（20歳未満を除いた喫煙率は34.4%）。

喫煙者の2/3が禁煙したいと考え、禁煙に失敗した人たちである。過去3回の調査でも同様の結果であり、喫煙者の多くは禁煙したいと考えながら喫煙を続けているのである。

禁煙した人をみると、男性は50歳以上に、女性は20歳代、30歳代に多かった。男性は健康上の理由で、女性は妊娠、育児との関係で

禁煙した人が多いと考える。

近年、喫煙と健康、受動喫煙、喫煙の低年齢化などが取りざたされており、たばこの宣伝、自動販売機など発売方法について真剣に考えていかねばならぬ課題である。また、啓発、教育に加えて、医療の中でニコチンガムなどを利用した禁煙法の普及が望まれる。現在は中学校で行われているニコチン、アルコールを含めた依存性物質の教育を小学校高学年から始める必要があることを主張したい。

#### (2) 飲酒

1年の間にアルコールを飲んだという人は68.4%（男性81.3%、女性56.7%）であったが、

男性は「週に2~3回」以上の習慣飲酒者が多く、女性は「月に1~2回」以下の機会的飲酒者が多かった。

「殆ど毎日飲む人」は、男性は40歳代、50歳代（50%）、女性は30歳代（10%）に多く、男女差を認めるが社会的進出度と関係あるかと考える。

しかし、男女とも中高年層は家庭で、中年の男性は仕事上のつき合いで、若年層は男女とも友人・仲間のつき合いで飲酒をする機会が多く、最近の世相を示している。

飲酒開始年齢の低年齢化が言われているが、男女とも本格的に飲酒を開始するのは18歳過ぎてからが85%を占めており、喫煙より遅れて飲酒が始まるといえる。

#### 4. 鎮痛薬、抗不安薬、睡眠薬の使用率

ほとんどの家庭で何らかの常備薬を用意していた。風邪薬、胃腸薬、湿布薬、鎮痛薬、ビタミン剤などが多い常備薬であった。

何らかの薬を常用している人は、男女とも年齢が高くなるにつれ高率で、特に50歳代（43%）、60歳以上（60%）に多かった。胃腸薬、血圧の薬は男性に多く、ビタミン剤、鎮痛薬は女性に多い傾向を認めた。鎮痛薬、精神安定（抗不安）薬、睡眠薬を常用していると回答した人の比率は以下のとおりである。

鎮痛薬：1.5%

精神安定薬：2.0%

睡眠薬：1.3%

鎮痛薬は、特に年齢差を認めず、幅広い年

年齢層に常用されていた。

精神安定薬、睡眠薬の常用者は特に60歳以上の人に高率であった。

依存性を有する鎮痛薬（依存性を持たないものもある）、精神安定薬、睡眠薬についてさらに詳細に使用状況を検討した。

「最近1年間に使用した人」を使用者とし、その中で「週数回以上使用している人」を常用者とした。

#### 鎮痛薬

使用率：34.9%（男26.8%、女42.3%）

常用率：3.0%（男3.0%、女3.0%）

男女とも20歳代から40歳代に比較的高い使用率を認めたが、大きな年齢差はあまりなかった。先の鎮痛薬を常用している人の回答率より週に数回以上の使用と限定した方が高率であった、年齢層に関しては同様の傾向を示していた。

精神安定薬（抗不安薬）を最近1年間に使用

使用率：6.1%（男性5.2%、女性6.9%）

常用率：2.6%（男2.4%、女2.8%）

男女とも高齢者に使用率が高くなる。

#### 睡眠薬

使用率：4.7%（男性4.4%、女性5.0%）

常用率：1.6%（男性1.6%、女性1.6%）

使用率は、男女ともに60歳を過ぎると急激に増加し10%を超えていた。

使用理由は、鎮痛薬は頭痛、生理痛、その他身体疾患の治療、抗不安薬、睡眠薬は不眠、不安、高血圧、その他精神的、身体的疾患の改善のためであり、ほとんどが治療目的による使用であった。

使用理由に「遊びの目的」と回答した人は、鎮痛薬で3人、抗不安薬で1人を数えたのみであった。

15歳以上の男女は約1億3百万人（平成4年10月1日）いることから換算して、年間に鎮痛薬は3,600万人、精神安定薬は約620万人、睡眠薬は約480万人の多くの人たちが使用していることになる。使用理由からみて、精神安定薬、睡眠薬は精神科のみならず、精神科以外の広い診療科で使われていると考える。

今回は使用率（常用率）を求めるのを目的としており、医療用向精神薬の乱用・依存者を同定する事は出来なかった。

しかし、もし昭和30年代や40年代前半に、これだけの向精神薬が販売され、臨床で使われていたなら大量の乱用・依存者が発生していたと考えるが、最近、福井らが施行している全国の精神科医療施設の実態調査<sup>8</sup>によると、睡眠薬らの向精神薬依存者の発生率は覚せい剤、有機溶剤に比べて著しく低率である。向精神薬、睡眠薬のほとんどが依存性の低いベンゾジアゼピン系薬物になっていることが、向精神薬乱用・依存の発生率の低い一つの原因になっていると考える<sup>9</sup>。

しかし、今回の調査より向精神薬の乱用・依存例も把握できるような質問を設定していかうと考える。

#### 5. 薬物乱用に関する意識調査

薬物乱用問題に関する認識度の質問について、「シンナー遊び」、「覚せい剤乱用」がわが国の主要な薬物乱用問題であって、一般の人に広がりつつある危険な状況にあることは認識しているが、自分とはあまり関係ない問題と考えている人が多かった。

中南米の麻薬戦争など外国での薬物乱用問題、あへん戦争のような歴史上の出来事については過半数以上の人認識していない。

家庭内でも薬物乱用問題は語られることが少ないことが調査からわかった。

男性に比べて女性の関心のなさが劣り、男女とも未成年者、60歳以上の人に劣る傾向があった。

これは、過去3回の調査結果と同じであり、今後、薬物乱用・依存についての学校教育、啓発・啓蒙のあり方について再検討の必要がある。

#### 6. 海外旅行、滞在と薬物乱用の関係

近年、海外との交流が盛んになるにつれて海外旅行、出張、留学、駐在を経験する人が増加している。その一部の人に大麻、コカインなどの違法薬物を経験する人がいると言われている。そこで海外旅行、滞在と薬物乱用の関係について質問を行った。

調査では、旅行、出張、仕事で駐在、留学などで海外に滞在したことがある人は1412人（35.8%）であったが、そのうち42人（3.0%）の人が薬物の使用を誘われたことが判明した。また、10人（0.7%）が自ら薬物を使用してお

り、大麻の経験者が8人であった。  
海外滞在中に薬物乱用に誘われたり、自ら使用する機会の多いことを示唆する結果である。

これらの人の中には帰国後も大麻、コカインの乱用を続ける人が多いであろうと推察する。また、国内で大麻、コカインの乱用を経験したと回答した人の多くは海外で生活を経験した人が多い。

## 7. 違法薬物乱用・依存者について

### (1) 過去、現在の違法薬物使用の経験

対象者自らが違法薬物使用の経験があるかの質問をした。

「最近1年間に使用経験あり」との回答をした人の率は非常に低く、3,946人中、有機溶剤3人(0.07%)、覚せい剤、大麻、コカインが各2人(0.05%)のみで、低率であった。

薬物乱用が社会問題になっている米国では、薬物に対する価値観が異なり、違法薬物は社会に浸透しており、市民の生活により身近な存在である。したがって薬物乱用者の発生率は高く、NIDA(National Institute on Drug Abuse)は世帯調査より1994年の違法薬物の乱用の実態を、「最近1ヶ月の大麻、コカインなどの違法薬物乱用者は総人口の6%である」と報告してい

る。このような社会環境下では乱用者自身も世態調査の質問に容易に答えてくれるであろうし、発生率の把握も容易である。

われわれの世態調査の目的も、覚せい剤、有機溶剤、大麻など違法薬物の乱用・依存者の実態の把握にあった。しかし、平成4年度、5年度の調査<sup>2,3</sup>で、特に「最近1年間の使用経験」の回答を得ることが出来なかった。質問内容、回収方法を換えることにより平成6年度<sup>4</sup>より回答を得るようになった。

調査圏の相違はあるが、平成6年度と7年度の薬物乱用経験者を比較した表を以下に掲示した(表42)が、いずれも低い回答率である。

わが国でも最近では薬物に対する価値観も変化しており、社会の一部で容認する動きもみられるが、それらの薬物はそれぞれの取締法にて厳しく規制されており、違法薬物を使用することは犯罪であるとの認識がまだ一般的である。調査は個人を同定するものでないことを説明し、強調しても、回答者は違法違法薬物の使用に関して「最近1年間に使用したことあり」と回答することを防衛的にさせ、躊躇させるものがあり、それが低い回答率となったものと考えられる。

警察その他取締機関に検挙された薬物事犯

表42 平成6年度、平成7年度の薬物乱用を経験した人の比較(%)

年度 ＼ 薬	平成6年度(対象数2,415人)			平成7年度(対象数3,946人)		
	最近1年 間に経験	1年以上 前に経験	計	最近1年 間に経験	1年以上 前に経験	計
有機溶剤	2(0.1)	39(1.6)	41(1.7)	3(0.07)	63(1.6)	69(1.7)
覚せい剤	1(0.04)	6(0.2)	12(0.5)	2(0.05)	10(0.3)	12(0.3)
大麻	3(0.1)	10(0.4)	12(0.5)	2(0.05)	15(0.4)	17(0.4)
コカイン	—	—	—	2(0.05)	1(0.0)	3(0.07)
ヘロイン	—	1(0.0)	1(0.0)	—	1(0.0)	1(0.0)

表43 平成6年度、平成7年度の薬物乱用に誘われた人の比較(%)

年度 ＼ 薬	平成6年度(対象数2,415人)			平成7年度(対象数3,946人)		
	最近1年 間にある	1年以上 前にある	計	最近1年 間にある	1年以上 前にある	計
有機溶剤	3(0.1)	34(1.4)	37(1.5)	6(0.2)	63(1.6)	69(1.7)
覚せい剤	1(0.04)	7(0.3)	8(0.3)	2(0.05)	21(0.5)	23(0.6)
大麻	3(0.1)	25(1.0)	28(1.2)	7(0.2)	34(0.9)	41(1.0)
コカイン	—	—	—	2(0.05)	6(0.2)	8(0.2)
ヘロイン	—	1(0.04)	1(0.04)	—	6(0.2)	6(0.2)



者の数、われわれの臨床経験から考えて、この有機溶剤、覚せい剤乱用者の「最近の乱用経験者」の比率は低すぎる観がある。この数値をもって最近の違法薬物乱用者の発生率とすることは難しい。しかし、わが国の薬物乱用の実態を示す貴重な数値であると考え。取締、啓発を中心とした薬務行政がある程度成功していることを意味しているのであろう。今後の調査で、ある薬物が増加したならば流行の危険性があると考えねばならぬだろう。

一方、「使用経験者」の平成6年度、平成7年度の結果を比較すると、有機溶剤、覚せい剤、大麻の「1年以上前の過去の経験者」の比率は双方とも類似した数値がでており、わが国の薬物乱用の動向を示していると考え。これまで覚せい剤と有機溶剤がわが国の主な乱用薬物とされてきたが、「過去の使用経験者」率は大麻が覚せい剤を上回っており、大麻の乱用者はこれまでわれわれが予想してきた以上に多いことが考えられる。少なくとも1994年の薬物事犯検挙者の覚せい剤14,896人、有機溶剤10,564人、大麻2,103人の比率をはるかに上回る乱用者が潜在していると考え。

また、初めてコカインの使用経験者を認めたことは、コカインが社会に浸透しつつある状況を示唆するものと考え。

## (2) 違法薬物の使用に誘われた経験

わが国の薬物乱用をめぐる状況を考えると「薬物使用を経験したか」との直接的質問よりは、「あなたの周囲で薬物を乱用している人を知っているか」、「あなたは薬物の使用に誘われたことがあったか」との間接的な質問の方がより乱用者の実態把握に効果的ではないかと考える。

有機溶剤、覚せい剤などの流行病型薬物乱用の伝播は乱用者から乱用者へと行われ、特に乱用者である友人、知人、仲間の影響力は非常に大きい<sup>1, 5)</sup>。

したがって、薬物の使用を誘われた人の周囲には、1人ないし複数の乱用者が存在していると考え。

「有機溶剤の使用を誘われた経験がある」と回答した人は69人(1.7%)、「最近1年間に誘われた人」は6人(0.2%)であった。

「覚せい剤の使用を誘われた経験」があると回答した人は23人(0.6%)、「最近1年間に誘われた人」は2人(0.05%)であった。

「大麻の使用を誘われた」経験があると答えた人は41人(1.0%)、「最近1年間に誘われた人」は7人(0.2%)であった。

「コカインの使用を誘われた」経験があると回答した人は8人(0.2%)、「最近1年間に誘われた人」は2人(0.2%)であった。

大麻が有機溶剤に次いで多かったが、回答者にとっては、覚せい剤は犯罪性のイメージが強く、大麻は覚せい剤よりダーティなイメージが少ないために回答し易いことを考慮しても、先に述べたように大麻がわれわれの予想以上に社会に浸透しており、潜在的乱用者が多いことが考えられる。

コカインは、過去3回の調査では出現してこなかったが、平成7年度では認められており、社会に浸透してきていることを示唆している。

ヘロインなどオピエイト系麻薬の乱用は、わが国では社会的、医療的に殆ど問題になっていないことを示唆している。

平成6年の結果と同じく(表43)、覚せい剤の「最近1年間に誘われた」人の回答率は特に低い。福井の臨床経験では、誘われた人の多くは使用していると考え。それゆえ回答しにくかったのではないかと推察する。しかし、「あなたは薬物の使用に誘われたことがありますか」の質問の方が「使用した経験がありますか」の質問より回答しやすいと考える。違法薬物の乱用者の把握には、この「誘われた経験の有無」の間接的な質問の方がより効果的であろう。

そして誘われた人の周囲には一人ないし複数の乱用者である友人・知人・仲間の存在していることから、「最近1年間に誘われた」人の比率は、最近の薬物乱用者率の下限と考える。

誘われた人の周囲に何人くらいの乱用者がいるか分かれば実態の把握はより可能であるが、それは今後、調査項目を考え、経年的に調査を重ねることにより解決されていく課題である。

表4 4 平成6年度、平成7年度の薬物乱用者の周知度比較 (%)

年度 ＼ 薬	平成6年度 (対象数2,415人)			平成7年度 (対象数3,946人)		
	1年以内 に知る	1年以上 前に知る	計	1年以内 に知る	1年以上 前に知る	計
有機溶剤	52(2.2)	156(6.5)	208(8.6)	39(0.9)	170(4.3)	209(5.2)
覚せい剤	8(0.3)	34(1.4)	42(1.7)	13(0.3)	55(1.4)	68(1.7)
大麻	4(0.16)	20(0.8)	24(1.0)	10(0.25)	32(0.8)	42(1.0)
コカイン	2(0.08)	4(0.16)	6(0.2)	5(0.14)	9(0.21)	14(0.4)
ヘロイン	1(0.04)	4(0.16)	5(0.2)	1(0.02)	3(0.08)	4(0.1)
薬物不明	7(0.3)	20(0.8)	27(1.1)	8(0.2)	16(0.4)	24(0.6)

(3) 周囲で薬物を乱用している人の周知度

「回答者の周囲で薬物を乱用している人を知っているか」の質問は、非常に間接的であるが乱用者をとらえる一つの方法である。情報は風聞によるものが多く、信憑性に欠けると思われるかもしれない。

しかし、同じ質問設定で行った平成6年度の結果と比較することにより意義を認めた(表44)。

平成7年度の調査で、有機溶剤を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.9%、「1年以上前に乱用していた人」の周知率は4.3%であった。平成6年度に比べ目立って低率であったが、警察庁は1992年、1993年の有機溶剤乱用少年の検挙者が前年に比べ著しく減少しており、1994年も減少していると報告している<sup>6</sup>。福井らも精神科医療施設の調査で近年の未成年者の有機溶剤離れを報告した<sup>8</sup>。この結果は、調査対象者の生活の周囲で有機溶剤乱用者が目立たなくなったことがこの数値となって現れたものと考ええる。

覚せい剤を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.3%、「1年以上前に乱用していた人」の周知率は1.4%であり、いずれも平成6年の調査と同率であった。警察庁<sup>6</sup>、厚生省<sup>7</sup>の資料によると近年の覚せい剤事犯検挙者の横這い状態を示していると報告しているが、その動向を示唆していると考ええる。

大麻を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.25%、「1年以上前に乱用していた人」の周知率は1.4%であり、平成6年度と比べ「1年以内に知る」が若干高く、「1年以上前」は同率であった。大麻乱用者の周知率は覚せい剤乱用者に比較的接近しており、「誘われた人」「使用経験者」の結果と同じく大

麻の潜在的乱用者はわれわれの予想よりはるかに多いことを示している。

コカイン乱用者は大麻に比べ周知率は低いが、社会に浸透しつつある現状を示唆していた。

平成6年度、平成7年度の1年以上前(過去)の周知率、現在・過去の周知率は有機溶剤を除いて近似した数値を示していることから考えて、薬物乱用者の周知度は最近の乱用者の発生率を計る一つの指標になると考える。最近1年間に薬物を乱用した人の率の上限と考えることが出来ないだろうか。

有機溶剤を「最近1年以内に乱用していた人」の周知率は0.9%であるが、和田は、1994年に13,000人の中学生を対象に「シンナー遊び」の実態調査を施行し、経験者は1.5%と報告しており<sup>9</sup>、決して高い数値ではない。

(4) 最近の薬物乱用者の発生率

以上の結果より、最近1年間に違法性薬物を乱用した人の比率を検討した。

最近1年間に違法性薬物を乱用経験をもつ人の比率は発生率を推定するには低すぎる。そこで、違法性薬物の使用に誘われた人の比率を用いた。その人の周囲には1人ないし複数の乱用者が存在することが考えられ、発生率の下限とした。

また、最近1年間で違法性薬物を乱用した人の周知度を発生率の上限とし、以下の発生率が考えられる。

- 有機溶剤0.2~0.9%
- 覚せい剤0.05~0.3%
- 大麻0.2~0.25%
- コカイン0.05~0.14%
- ヘロイン0~0.02%

有機溶剤乱用者の上限の0.9%はやや高く、覚せい剤の下限の0.05%は低すぎ、またヘロインの0.02%も高率であると考える。

大麻乱用者の発生率が下限、上限の差が少なく安定したりつであるが、今後、経年的に同規模の世帯調査を施行することに動向も明らかになり、より確実な発生率を算定することが可能となると考える。

## E. 結論

全国の層化2段無作為抽出法で抽出した満15歳以上の男女5,000を対象に個別訪問留置法にて「薬物乱用・依存の世帯調査」を実施した。調査期間は平成7年10月3日から10月31日であった。

1. 有効回答数(率)は3,946(78.9%)であった。

2. 「日常生活で不安感、緊張感を持っている」と回答した人は、男女とも40歳代、50歳代に比較的高率に認められた。

「健康状態」が良くないと感じる人は高齢者に高率で、60歳以上で20%であった。

「不眠、途中覚醒がある」など睡眠障害に苦しむ人は60歳以上で20%が悩んであいた。抗不安薬、睡眠薬の常用率は有意に高かった。

3. 喫煙率は32.7%(男性53.3%、女性13.90%)であった。喫煙者の2/3が禁煙を望んでいた。若年者の喫煙開始時期は低年齢化の傾向を認められた。

4. アルコールを飲むという人は68.4%(男性81.3%、女性56.7%)で、殆ど毎日飲むと回答した人は男性は40歳代、50歳代で50%、女性は30歳代で10%と高率であり、社会的進出度と関係あった。

5. 日常生活で何等かの常用薬を使用している人は34.5%で、60歳以上は60%であった。

6. 鎮痛薬を「週に数回以上」使用している常用者は3.0%、精神安定薬は2.6%、睡眠薬は1.6%であり、女性に多く、50歳以上の男女により高率であった。

7. 薬物乱用問題に対する認識は、社会的には大きな問題であるが、自分とは関係がないと考える人が多かった。

8. 海外旅行、滞在中に薬物の使用を誘わ

れた人は3.0%、使用した人は0.3%であり、海外での薬物乱用の誘惑の機会が多い。

9. 生活の周囲で薬物乱用者を知っていると回答した人(1年以内で知っている人)は、有機溶剤5.2(0.9)%、覚せい剤1.7(0.3)%、大麻1.0(0.25)%、コカイン0.4(0.14)%、ヘロイン0.1(0.02)%であった。

10. れまでに薬物乱用に誘われた経験をもつ人(1年以内に誘われた人)は、有機溶剤1.7(0.2)%、覚せい剤0.6(0.05)%、大麻1.0(0.2)%、コカイン0.2(0.05)%、ヘロイン0.2(0)%であった。

11. 薬物乱用を経験した人(1年以内に経験した人)の比率は、有機溶剤1.7(0.07)%、覚せい剤0.3(0.05)%、大麻0.4(0.05)%、コカイン0.07(0.05)%、ヘロイン0.2(0)%であった。

12. 大麻の社会における潜在的乱用者は考えられている以上に多いことが判明した。

## F. 参考文献

1. Bejert N: Social Medical classification of addiction. Int J addict. 1969.
2. 福井進、和田清、伊豫雅臣: 薬物依存の世帯調査、平成4年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者福井進)、平成4年度研究報告書、p9-23、1993.
3. 福井進、和田清、伊豫雅臣: 薬物依存の世帯調査、平成5年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者福井進)平成5年度研究報告書、p5-26、1994.
4. 福井進、和田清、伊豫雅臣: 薬物依存の世帯調査、平成6年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究(主任研究者福井進)平成6年度研究報告書、p5-34、1995.
5. 福井進: わが国の薬物依存の現状、薬物依存(佐藤光源、福井進編集) pp49-59、世界保健通信社、大阪、1993.
6. 警察庁生活安全局薬物対策課: 平成6年中における覚せい剤等薬物事犯の統計資料。1994.
7. 厚生省薬務局: 平成6年における、麻薬・覚せい剤行政の概況。1994.

8. 清水順三郎、福井進：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査、平成5年度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成5年度研究報告書、p79-104、1995.

9. 和田清：中学生における「シンナー遊び」  
・喫煙・飲酒についての調査研究、平成6年

度厚生科学研究費補助金-薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者福井進）平成6年度研究報告書、p35-60、1995.

## 質問内容

- 
- 問 1. 最近1年間のあなたの健康状態や生活状態などについてお伺いします。  
以下のア～キのそれぞれについて、お答え下さい。(それぞれ○は1つ)  
ア) あなたの健康状態はいかがですか。
- 
- 問 1. イ) あなたは、日常生活、活動に意欲がなくなることがありますか。
- 
- 問 1. ウ) あなたは、毎日している仕事(家事・勉強)でうまくいかないことがありますか。
- 
- 問 1. エ) あなたは、日常生活で不安を感じたり、緊張したことがありますか。
- 
- 問 1. オ) あなたは、眠りにつけなかつたり、睡眠の途中で目が覚めたり、眠った感じがしなくて困ることがありますか。
- 
- 問 1. カ) あなたは、眠りすぎたり、昼間に眠くてたまらない時がありますか。
- 
- 問 1. キ) あなたは、現在の生活に満足していますか。
- 
- 問 2. あなたは、現在たばこをお吸いになりますか。(○は1つ)
- 
- 問 2-補問1. (たばこを吸っている方におたずねします。) これまでに健康その他の理由で、禁煙をしようとしたことがありますか。(○は1つ)
- 
- 問 2-補問2. あなたが、初めてたばこを吸ったのはいつ頃ですか。(○は1つ)
- 
- 問 2-補問3. では、本格的にたばこを吸い始めたのはいつ頃ですか。(○は1つ)
- 
- 問 3. アルコール(酒、ビール、ウィスキー等)はお飲みになりますか。(○は1つ)
- 
- 問 3-補問1. (アルコールをお飲みになる方におたずねします。) 最近は何、主にどういう機会に飲むことが多いですか。(○はいくつでも)
- 
- 問 3-補問2. では、初めてアルコールを飲んだのはいつ頃ですか。(○は1つ)
- 
- 問 3-補問3. あなたが、本格的にアルコールを飲み始めたのはいつ頃ですか。(○は1つ)
- 
- 問 4. 次の薬のうち、あなたのご家庭にいつも用意しているものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)
- 
- 問 5. 次の薬のうち、あなたが常用(週に数回以上を使用)している薬がありますか。あてはまるものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)
- 
- 問 6. あなたは、最近1年間に鎮痛薬を使用したことがありますか。(○は1つ)
- 
- 問 6-補問1. (問6で2～6と答えた方へ) 鎮痛薬はどこから入手しましたか。(○はいくつでも)
- 
- 問 6-補問2. (問6で2～6と答えた方へ) 使用理由を教えてください。(○はいくつでも)
- 
- 問 6-補問3. (問6で2～6と答えた方へ) 服用後に次のようなことを経験したことがありますか。あるものすべてに○をつけて下さい。(○はいくつでも)
- 
- 問 7. あなたは、最近1年間に精神安定薬(抗不安薬)を使用したことがありますか。(○は1つ)
- 
- 問 7-補問1. (問7で2～6と答えた方へ) 精神安定薬(抗不安薬)はどこから入手しましたか。(○はいくつでも)
- 
- 問 7-補問2. (問7で2～6と答えた方へ) 使用理由を教えてください。(○はいくつでも)
-

- 問 7-補問3. (問7で2~6と答えた方へ) 服用後に次のようなことを経験したことがありますか。(○はいくつでも)
- 問 8. あなたは、精神安定薬(抗不安薬)についてどうお考えですか。(○はいくつでも)
- 問 9. あなたは、最近1年間に睡眠薬を使用したことがありますか。(○は1つ)
- 問 9-補問1. (問9で2~6と答えた方へ) 睡眠薬はどこから入手しましたか。(○はいくつでも)
- 問 9-補問2. (問9で2~6と答えた方へ) 使用理由を教えてください。(○はいくつでも)
- 問 9-補問3. (問9で2~6と答えた方へ) 服用後に次のようなことを経験したことがありますか。(○はいくつでも)
- 問10. あなたは、睡眠薬についてどうお考えですか。次の中からあてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。(○はいくつでも)
- 問11. 薬物乱用という言葉を知っていますか。(○は1つ)
- 問12. 次の薬物の中で、あなたが知っている名前があったら、いくつでも○をつけて下さい。(○はいくつでも)
- 問13. 乱用薬物を使用すると、依存(使用を止めたくても止められなくなる状態)が形成されることを知っていますか。(○は1つ)
- 問14. あなたは「あへん戦争」について知っていますか。(○は1つ)
- 問15. 米国・中南米諸国の「麻薬戦争」について知っていますか。(○は1つ)
- 問16. 覚せい剤乱用の問題は、暴力団など特定の世界の人に限らず、一般の人々にも関係のある問題だと思いませんか。(○は1つ)
- 問17. 「自分にも、薬物乱用への誘惑の手が伸びてくることもある」と思いませんか。(○は1つ)
- 問18. 「シンナー遊び」が一部の未成年者の間で流行していることを知っていますか。(○は1つ)
- 問19. 覚せい剤がわが国の社会で長年にわたり乱用されていることを知っていますか。(○は1つ)
- 問20. 家庭内で薬物乱用に関係する話をしたことがありますか。(○は1つ)
- 問21. あなたは、海外旅行、海外出張、海外留学をしたことがありますか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。(○はいくつでも)
- 問21-補問1. (問21で2~6と答えた方へ) 海外滞在中に、あなたの周囲で薬物を使用した人を聞いたり、見たりしましたか。(○は1つ)
- 問21-補問2. (問21で2~6と答えた方へ) 海外滞在中に、あなたは薬物使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)
- 問21-補問3. (問21で2~6と答えた方へ) 海外滞在中に、あなたが使用された薬物があれば教えてください。(○はいくつでも)
- 問22. あなたの周囲で、薬物を乱用している(乱用していた)人を知っていますか。(○は1つ)
- 問22-補問1. その人が使用している(乱用していた)薬物は何ですか。(○はいくつでも)
- 問23. あなたご自身、これまでにシンナー等有機溶剤の使用を誘われたことがありますか。(○は1つ)
- 問23-補問1. 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)

問24. あなたご自身、これまでに覚せい剤の使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)
問24-補問1. 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)
問25. あなたご自身、これまでに大麻(マリファナ)の使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)
問25-補問1. 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)
問26. あなたご自身、これまでにコカインの使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)
問26-補問1. 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)
問27. あなたご自身、これまでにヘロイン等麻薬の使用に誘われたことがありますか。(○は1つ)
問27-補問1. 誘った人はだれですか。(○はいくつでも)
問28. あなたは、これまでに「シンナー遊び」を経験したことがありますか。(○は1つ)
問29. あなたは、これまでに「覚せい剤」を使用したことがありますか。(○は1つ)
問30. あなたは、これまでに「大麻(マリファナ)」を使用したことがありますか。(○は1つ)
問31. あなたは、これまでに「コカイン」を使用したことがありますか。(○は1つ)
問32. あなたは、これまでに「ヘロイン」を使用したことがありますか。(○は1つ)
※ 地域別
問33. 性別を教えてください。
問34. お年は満でおいくつですか。
※ 性×年齢
問35. 最後に出られた学校は次のどれにあたりますか。(中退・在学中は卒業とみなす)
問36. あなたは、結婚されていますか。配偶者の方はご健在ですか。(○は1つ)
問37. あなたは、現在、パートタイム、アルバイト等を含めて何かお仕事をされていますか。(○は1つ)
問37-補問1. (問37で1~5と答えた方に) どのようなお仕事ですか。具体的にご記入の上、あてはまる番号に1つだけ○印をおつけ下さい。(○は1つ)